巻　頭　言

時間生物学のさらなる飛躍にむけて

吉村　崇✉
名古屋大学・基礎生物学研究所

成熟した学問領域に関連する学会では、しばしば学会の活性化にむけて何をすべきか、といった議論が繰り広げられる。どんな学問領域にも勢いのある時期と、そうでない時期が存在する。学問領域の勢いは意図的に、あるいは外圧によって生み出されるというより、技術革新などの時代の流れにのって、自然発生的に生まれることが多い。学問に勢いがある時期に学会のさらなる活性化を図るのは楽しいが、充電すべき時期に無理やり、尻をたたいて活性化するのは容易ではない。

時間生物学はどうだろうか。ご存知のとおり、時計遺伝子が発見された1990年代以降、異分野からの研究者の参画もあり、大いに活性化した。この間、概日時計の分子機構の理解については大幅な進展があったため、既に成熟してしまった学問領域に見えるという意見も分野外から聞こえてくる。しかし果たしてそうだろうか。私はそうは思わない。時計タンパク質の原子レベルでの理解、時計に支配される様々な生理機能の解明、さらにはトランスレーショナルリサーチなど、多方面において優れた研究がその後も継続的に成し遂げられている。研究の発展によりフォーカスすべき対象が広がった分、分野全体の関心が分散して見えているだけではないだろうか。

私は2009年から2011年までEuropean Biological Rhythms Society（EBRS）の理事（ボードメンバー）を、また2014年からはSociety for Research on Biological Rhythms（SRBR）の理事を担当させていただいており、様々な議論に参加してきた。姉妹学会とも言うべきこれらの学会の理事会で、時間生物学という学問のさらなる発展のために何をすべきか、ということが話題に上ったことはないが、この分野の将来を担う学生、ポスドク、若手スタッフの育成に力を注いでいることは注目に値する。学問領域が継続的に発展していくためには、新しい人材の加入が不可欠だからだ。今年の学術大会の前日には、時間生物学トレーニングコースを開催させていただける運びとなった。ここでは、若手研究者が研究者として生き残る際に必要な「研究費獲得戦略」、「研究計画の立て方」、「ラボマネージメント」などについて、近藤孝男先生、岡村均先生、遠藤求先生、榎木亮介先生にご講演いただけるので、年齢、肩書きを問わず、ご参加いただけると幸甚である。

さて、時間生物学が学問的にさらに飛躍を遂げるにはどうすれば良いか。答えはシンプルである。面白くない研究分野に人は集まらない。学会員が、時間生物学分野の研究を心の底から楽しみ、そこで得られた研究成果を通じて、分野の魅力を国内外に存分に発信していくことに尽きるのではないだろうか。それが新しい仲間を呼び込み、新たな時間生物学を紡いでいくことにつながるように思う。

✉takashiy@agr.nagoya-u.ac.jp